

第7回8020童話賞

児童生徒の部「最優秀賞」作品

「一枚の絵」

中学 3年生

恵は、おじいちゃんとおばあちゃんが大好きだ。二人が大きなおせんべいをかじりながら、楽しそうに笑っている絵をノートに描いた。

いかにも丈夫な歯という感じの絵だ。

「これ、いいじゃん。」

とお母さんに言われて、歯の衛生週間のポスターに描いて応募した。

すると、なんと特選に選ばれた。

おじいちゃんは、もう天国だけど、ポスターの上の方には『いつまでも いい歯で すっ と いっしょだよ』と青い文字で標語をかいた。下の方には『8020』と赤でかいた。なんか、かっこいい！

『8020』は覚えてたての数字とどうか言葉。背景の色は、二人が明るい気分でいられるように淡い黄色にしてみた。

恵は、おばあちゃんを喜ばせたくて、作品が展示されている会場へ連れて行った。

案の定、おばあちゃんは自分が描かれている絵を見て、うれしそうだった。

「へえ、これが私？」

「うん。」

「おじいちゃんも笑っているねえ。」

「おばあちゃんも楽しそうでしょ？」

「うん、うん。」

絵を見ているおばあちゃんは、絵の中のおばあちゃんより、もっと、うれしそうに笑っていた。

その笑顔を見て、恵も、すごくうれしくなった。

帰り際、おばあちゃんが恵にたずねた。

「恵ちゃん。『はっせんじゅほう』って何。」

「これはね、『はちまるにいまる』だよ、おばあちゃん。」

「どういう意味なの？」

「八十歳で二十本の・・・。」

と、そのまま言いかけで、恵は、はっとした。

おばあちゃんは、まだ七十歳なのに歯が一本も無いということを出したからだ。

恵は小さな声で、

「八十歳で二十本の歯を残そうっていう意味なの。」

と言った。おばあちゃんの顔の表情がいつきに暗くなった。

「ああ、おばあちゃん、ごめん。本当にごめんなさい。」

恵は、そう心の中で何度も言ったけれど、口に出すことは出来なかった。

おばあちゃんは遠くを見ながら、しばらく黙った後、

「他の子も書いていたねえ、『8020』って。」

と、ぽつんと言った。

恵は、おばあちゃんと一緒にポスターを見に来たことを後悔した。

「あく、どうして『8020』なんてかいたかったんだろう？」

おばあちゃんと別れた後も、恵の心は晴れなかった。

『8020』という言葉は悲しい響きで、頭の中に何度も聞こえてきた。

おばあちゃんにとっては、もっと悲しい響きで聞こえているに違いない。

それにしても二十本って、すごいな。

おばあちゃんが〇本っていうことを考えると、すごく高い目標という感じがした。

すっかり落ち込んでしまった恵は、そのことをお母さんに話した。

「悲しいなんて思っちゃダメ！」

「え？」

「恵にむし歯が一本も無いのって、誰のおかげだと思ってるの?」

「誰?」

「おばあちゃんだよ!」

「どういうこと?」

「おばあちゃん、歯がなくなって、好きなものを食べられなくなっちゃったの。それで、歯が大切なことを身にしみて感じたから、恵が生まれたとき『恵の歯を大切にしていってね』って、私に言ったの。そして、まだ歯が生える前から、恵の口の中をガーゼできれいにしてくれたり、歯医者さんへフッ素を塗りに連れて行ってってくれたりしたんだよ。」

「へえ、そうだったんだ。」

恵は、

「おばあちゃん、ありがとう。」  
と電話をした。

「恵は八十歳で二十本以上残せるようにがんばってね。」

「はいっ!」

「あの絵が返ってきたら、おばあちゃんにくれな?」

「もちろん、いいよ。」

おばあちゃんは、電話の向こうで泣いているようだった。

「あの絵を家に飾って、私も毎日、入れ歯をピカピカに磨くからね。」

恵はおばあちゃんが元気を取りもどしたのどうれしくなった。

おじいちゃんとおばあちゃんの絵を描いてよかった!そして、自分の歯を大切にしていって、一生、自分の歯で食べていこうと思った。

おわり